

菊池佐野地区（菊池市）

農を楽しむ（作業効率化・品質向上・6次産業化）



ビジョンの概要

地区の課題

- ・農家の高齢化
- ・農業後継者の不足
- ・小規模農家が多く、機械などへの個別投資が難しい
- ・数十年前に整備されたくり園の古木化・廃園化
- ・5戸ある畜産農家も小規模経営であり、WCSや牧草収穫は委託に頼っている

ビジョン

地区の目指す姿

（1）作業の効率化と法人経営

- ①高齢者の農業知識と営農意欲を活用し、軽労働の作業で法人経営に参加する。
- ②農地集積や機械導入によるコスト低減と労力軽減。
- ③オペレーターを雇用する。
- ④WCS・牧草の高性能収穫機械の確保。
- ⑤ミニショベルと果樹園管理機械を導入。



（2）農産物の増収と品質の向上

- ①くり園を再度整地し、改植・新植により樹園地区として増収増益を図る。
- ②営農のリーダーを育成し、農産物の増収と品質向上を図る。
- ③有機堆肥により地力を高め、高品質の農作物を作り出す。

（3）農産物の6次産業化を目指す

- ①たけのこ・しいたけ・くり等の二次加工により付加価値を高め、6次産業化を目指す。
- ②中心となる女性の組織強化を図る。

成果目標

- ・法人のくり園面積を8haまで増加する。
- ・飼料作物の作付面積を17ha確保する。
- ・ごぼうの作付面積を2ha確保する。

ビジョン策定のプロセス

資金確保のための法人化を模索

基盤整備が進み大型農業機械の必要性が生じたが、小規模農家で設備投資が難しい。法人化を視野に平成28年「佐野の農業を考える会」を立ち上げ、30年に「農事組合法人菊池佐野」を設立し、本事業のビジョン策定に至った。

必要な機械・施設の導入を計画

本事業を活用することで①軽作業化・効率化を図り農家の負担軽減②法人による地域内の古木化、廃園化したくり園の再生、くりの生産・加工を主軸に取り組みたいと考えていた。改めて営農体制について協議し、必要な農業機械・施設の導入等を計画。

法人経営で補い合う農業に

法人の役割について「高齢農家の労働力不足を補う、収益を上げるための法人であって、土地や収入を奪うものではない」という認識をある程度浸透させたこと、共同での農業機械導入等メリットが大きいこともあり、比較的スムーズに合意に至った。

高齢者の「営農の生きがい」を活かすにも個々の負担軽減が必要で、大きなメリットになる。

具体的取り組み

(1) 作業の効率化と法人経営

- 高齢者の農業知識と営農意欲を活用し、軽労働の作業で法人経営に参加する
→ くり塩農地の管理を法人に任せられるようになったため、水田ごぼう等の野菜栽培に力を入れられるようになった。
- 農地の集積や機械の導入によるコスト低減と労力の軽減
→ 省力化して余力が生まれた、くり新植面積拡大につながった。
- オペレーターを雇用する
→ 雇用までには至っていない。
- 飼料稲・牧草の高性能収穫機械を確保
→ 重労働である飼料の収穫作業が軽減され、生産かスピードか上がった。
- ミニショベルと果樹園管理機械を導入
→ バックホー、くり剪定枝処理用ウッドチップパー等を導入。



(2) 農産物の増収と品質の向上

- くり園を再度整地し、改植・新植により樹園地区として増収増益を図る
→ 法人でくり園の経営面積を10haまで拡大した。
- 営農のリーダーを育成し、農産物の増収と品質の向上を図る
→ Uターンによる新規就農者が4人。
- 有機堆肥により地力を高め、高品質の農作物を作り出す
→ 成果が上がるまでには至っていない。

(3) 農産物の6次産業化を目指す

- たけのこ・しいたけ・くり等の二次加工により付加価値を高め、6次産業化を目指す
→ 真空包装機等の加工設備が整いつつある。
- 女性の組織強化を図る
→ 組織強化までには至っていない。

成果

成果目標

- ・ 法人のくり園面積を8haまで増加する。
- ・ 飼料作物の作付面積を17ha確保する。
- ・ ごぼうの作付面積を2ha確保する。

結果

- ・ くり⇒10ha
* 利用権設定しJAに出荷中。
60aは法人として新植
- ・ 飼料作物⇒15ha
(WCS6ha・イタリアンライグラス9ha)
- ・ ごぼう⇒2ha

今後に向けて

① くり園の充実とイノシシ対策

